

十島村教育委員会だより 平成29年7月号

せわやがトカラ情報

南北160km 「心をつなぎ 気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771

7月・・・教育研究大会

7月24日、7月25日の2日間。第42回十島村教育研究大会が、村のほとんどの先生方が参加して開催されました。本村に学制が発表されたのは昭和5年です。それを本村公教育の起点とすると、教育の歴史は82年ということになります。そう考えますと、42回という数字はその半分あるいはそれ以上ということになります。つまりこの研究大会は、本村教育の歴史そのものと言っても過言ではありません。諸先輩方が、これまで営々と築いてこられた教育実践に対して、改めて感謝しなければなりません。



十島村教育研究大会

何よりも、一年に一度ではありますが、村に勤務する先生方が、日ごろの学習指導法や生徒指導などの教育実践について、時間をかけてじっくりと話し合いをすることが出来るというのが、本大会の魅力です。村には、1年目、2年目の若い先生方が多くいます。その先生方もこの研究大会で、多くのものを先輩の先生方から吸収して、成長の機会としているのだと思います。

昨年は、諏訪之瀬島と小宝島の2つの分校が本校となり、7つの学校がすべて本校になったということで、新たな十島の教育元年でありました。今年は、それにも増して、さらなる飛躍を期待しています。

研究会は、1日目に、低中高学年に分かれ分科会での情報交換会。全体会での集合学習、修学旅行、職場体験学習などの反省・展望。そして教科部会と大変密なものとなりました。

また、2日目は、枕崎市教育委員会の丸山屋敏教育長による講演と十島村教育会の総会が行われて、2日間の予定をすべて終えることができました。

十島村教育研究大会



村ではこの夏、黒潮の流れを利用した海流発電実証試験が、口之島沖で始まります。実験機が「かいりゅう」と命名されました。

子どもたちの応募の中から選ばれたものです。「かいりゅう」は、50軒の家の1年分の電気を生み出す能力があるということです。2020年ごろの実用化を目指しているようです。

また、来年4月からは新しい船が就航します。今よりも長さも5m長くなり、速度も幾分早くなると思われます。村全体生活にも少なからず変化があるのではと思います。これらのことが、すぐに村の教育にも良い影響をもたらしてくれるのではないかと期待しています。

アメリカのフロリダの海流よりも素晴らしい黒潮の流れである。と評価されたトカラの海です。この夏、ここから教育においても、新しい何かが生まれるようなそんな予感がします。楽しみです。

第1回文化財保護審議会（7/8）

本年度は、諏訪之瀬島で開催しました。会議では、成尾委員（地質学）から、「諏訪之瀬島の火山活動史とその特徴」について報告があり、諏訪之瀬島の火山噴出物や年代等も理解できました。会議の途中で中学校の生徒3名も出席し、良い学習が出来ました。中学生からは、火山の崩落等についての質問もありました。



その後、埋没墓やマルバサツキの群生地、巨大山桜等の調査を行いました。

女性団体等研修視察（7/13,14）

7月13、14日に十島村女性団体（8名）と、霧島市女性団体との研修（交流）が行われました。初めての試みでしたが、参加者は、意見交換等とおして、女性団体としての共通の課題や今後のあり方などを積極的に学んでいらっしゃいました。

また、美術館や音楽ホールなどの訪問をおして、心豊かな充実した研修ができました。



部落差別解消推進法が公布・施行されました。(H.28.12.16)
※部落差別は、被差別部落があるから存在しているのではなく、部落差別があるから、部落差別をする私（たち）がいるから被差別部落があるのです。
部落問題を正しく理解し、お互いの人権を尊重し合う社会を築きましょう。

シリーズ——新聞に投稿1
(平成29年6/8南日本新聞掲載) 中之島中1年 羽生 健

こ初は食と もれてとた20、「とフさ る備行 えがぼガ
とめ特べ、そ2なも言。ぢあそしにん海くをく家な、くブ父
がて別釣の匹いうつガくつて出の岸なし族か全は釣が
で釣に。れ夜釣僕れてづら、時待て水にいと全然何り「天
きり感自た、りははしくだ。いきだつてた着だがに買。釣度に天
のじ分魚一上父かれ。父のた。てさまくろらなど。れか行気
。楽たでを緒げにつた。に魚一さいをりをとうもつ、ず釣こい
し。釣唐に外た。にげとおた。つが塩、た近、りうい
さこつ揚行こしがけ。見茶思。けで塩、た近、りうい
をのたげつとて、つる色つ先、きがず倒だの おにーから
味日魚にたがも生こるとのが。水て引つくがおし行とら、
わ僕のしおでらさうと魚引び。たいいとさ、兄、ろつ誘、七
うは味て兄きたって大よがさきり。またた思い釣さん、いたつ七
。さ。たいいきかか上げ。に。岩つなりんと。とてツ
んと。そ魚魚たつと。糸しにいおお一。全はれ海、岸
と。家ののをでね。と。をりたたもの緒、くあた。に
族。後触とーい、き、落しく。し。準に、思る。に



シリーズ——新聞に投稿2
(平成29年6/20南日本新聞掲載) 小宝島中2年 萩原 康成

いなにの先と よだ少受でま業 てて每一らたとか
で環過人生と島うとしけすでで転いく日輪でくがれ私
す境ご々やもにに思慣て。はす校これの車すさ多るは
。でしにたにはないれい前、。しのてよに。んいと「こ
、た感つ島高りままの一同てが、う乗。特あで「こ
自い謝を校ますせし学人級驚と少にれる。頑つすうの
分でし一離がした。んた校で生いてし同る。張て。一学
自すな人れな。とで。で授はたはず級よう。つ、一ん校
身。がのす。自し最は業一こうつ生に。た。こ。に。き
よ宝。級卒。で。分た初30を人とれでが。な。こ。い。答。て
り島楽生業、中。見でいくて。りつよに。た。こ。い。答。て
成のし。す。見でいくて。りつよに。た。こ。い。答。て
長自く両。る。を。は。に。で。い。私。ま。た。う。つ。こ。り。難。な。れ。か
さ。然。有。親。ま。校。言。一。驚。授。た。が。す。で。に。き。こ。い。答。て
せ。豊。意。や。で。卒。え。こ。き。業。そ。来。す。な。あ。す。い。と。い。と
た。か。義。島。業。る。う。を。う。る。授。つ。つ。か。が。こ。聞

小宝島での学校生活

シリーズ——新聞に投稿3
(平成29年6/27南日本新聞掲載) 口之島小1年 井 翔

強くなりたい
ぼくはいま、しょうぎにむちゅうです。いえで
は、おとうさんやおねえちゃんとよくしょうぎを
しています。
がっこうでも、ひるやすみにじょうきゅうせいやせんせい
いとしょうぎをしています。ぼくのがっこうは、にんずう
がすくなくて、11にんしかいません。どうきゅうせいはい
ないので、しょうぎのあいてはいつもじょうきゅうせい
です。
スポーツやべんきょうではかなわないけど、しょうぎで
はかてるじしんがあります。ほとんどのしょうがくせい
はかたつてあります。このまえは、せんせいにもあ
すこしでかてそうでした。
ふじい四だんみたい、しょうぎがつよくなって、せん
せいたちにもかたたいです。



シリーズ——新聞に投稿4
(平成29年6月26日南日本新聞掲載)
諏訪之瀬島中1年 日高 颯

職場体験で学んだ
5月29日から3日間、職場体験学習がありました。ぼくは鹿児島中央卸売市場魚市場で働きました。
1、2日目は、せりの見学や商品作りをしました。中でも、印象に残ったのは「まぐろのこんぶ巻き」を作ったことです。作る10分ぐらい前に「作り方は秘密なんですよ」と言っていたのに、作り方だけで無く、おいしくする工夫まで教えてもらい、職場のみなさんの温かさを感じました。
3日目は魚の配達や販売をしました。中でも楽しかったのは配達で会った人々でした。「ありがとう」と言ってくれました。中には「がんばれ」と応援してくれた人もいました。二つの職場で学んだことを、これからの生活に生かしたいです。

十島村の宝島小中学校からのメッセージ

宝島小中学校教頭 福留真一
トカラ列島の最南端、県本土から約300km。宝島までは、「フェリー」として約13時間かかる。石炭質である島の土壌は、落花生やらっきょうの栽培に適しており、牛の放牧も主要産業となっている。近年、Iターン者や山海留學生の増加で、益々島も活気づいている。

昨年4月1日、色とりどりの紙テープが舞う中、宝島に向かった。フェリーは、口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、小宝島と、6つ島々の港に立ち寄り、それぞれの島に赴任する教員とその家族を降ろしていく。各港で、島の子どもたちが太鼓や踊り、演奏等を披露し、出発するフェリーが見えなくなるまで手を振ってくれた。いつの間にか一生懸命手を振り返していたことを鮮明に覚えている。

島での生活も2年目となる。多くの地域の方々から優しい言葉や笑顔をもらいながら、島での生活にもすっかり慣れた。校務に専念できるようになってきたが、まだまだ、多くの方々から助けられながら、教わりながらの毎日だ。

私の離島での勤務は2回目であり、前々任校は県最北端の獅子島であった。当時の校長先生の言葉を思い出す。「我々は運命共同体」。宝島で暮らしてさらにこの言葉が胸にしみる。生活物資を運んでくるフェリーは、私たちの正に「命綱」であり、荷物が届く特に土曜日は、地域の方々も職員もほとんどが港に来て集積作業を行う。年2回の島内一周草刈りは、全島民で朝から夕方まで黙々と作業をする。地域行事も社会体育もさかんだ。

今年、地域の方々や現業さん方の御尽力で、校舎の裏手に学校農園も完成した。その広さはおおよそテニスコート2つ分。栽培活動もいっそう楽しみが増える。本校は、年間を通して積極的に研究授業が実施され、その授業研究では常に活発な協議が行われる。職員間で学び合い、高め合う雰囲気はすでに醸成され、意欲あふれる授業が展開される。このような職場で働けることをとてもありがたく感じている。

～私からのメッセージ～
「授業で勝負！」とよく言われる。教科指導力の向上は、児童生徒の学力向上に直結する。小中9年間を見通し、「確かな学力」を身に付けさせることは恒久の使命。「15の島立ち」の日に、島々から巣立っていく子どもたちが自信を持って羽ばたいていけるよう研鑽を深めていきたい。